

Title	理財学会春季大会記事
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.8 (1927. 8) ,p.1108(138)- 1109(139)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270801-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理財學會春期大會記事

開會の辭に次で會長氣賀勘重氏登壇し、理財學會の歴史と今回行はれたる同會規約改正の次第を述べ、本來の性質上學生を中心とする會なる事を説き、今後に於ける學生の熱心と協力を希望する。次に講演に移り、増井幸雄教授は「本邦商船隊の改善に就いて」なる題下に、現在に於ける本邦の商船が徒らに噸數のみ多くして優秀船舶に乏しき事實を挙げ、本邦の海運界が今日の世界に活躍しつつあるは、主として固定費(船價、海員の勞銀等)の少き爲であるが、此の強味は次第に失はれつつあると論じ、改善策の主たるものは(一)政府の一層の努力を必要とする事、(二)船主をして海運業の國家的使命に覺醒せしむる事、(三)船舶に對する金融の途を開く事、等を挙げ、之を怠るならば將來日本は有り餘る古船の處置に窮するに至るであらうと警告する。

原邦造氏は「我國財界の現在及び將來」なる題下に、我國の經濟界は現に如何なる方向に如何なる形式を採つて進むつゝあるかの問題を提出し、(一)吾國は明治維新を轉換期として都市經濟より國民經濟に移つたが、昭和の今日は漸次世界經濟の方向に進みつゝある、(二)吾國の經濟狀態は今の複雑なる形式より單純統一的なる形式に移らんとしつゝある。之は實際に於て極めて困難である。之を促進する手段としては組合制度の聯結統一、財界の整理改善、及び大同團結があると述べられた。

次で前田多門氏は「勞働立法に關する國際的關係」に就き、ジュネバ會議に於ける體驗に即して左の如く語る。今日のジュネバの勞働會議は第一回華府會議ほどの活氣が無いが、之は二讀會制度の採用と、其後の世界の反動的氣分との爲である。併し其の將來は必ずしも悲觀すべきものでは無く、寧ろ之に依つて穩健なる發達を遂ぐるであらう。日本は勞働條約に批准せぬため頗る不利なる立場にあるが、實質より眺むれば本邦の勞働者保護の施設は餘り遜色は無い。ともあれ徒らに表面の粉飾に耽るを休めて、名實共に世界の大国とならねばならぬ。之は若き人々の使命である、云々。

最後に河合榮治郎氏は「社會學徒としての主要問題」なる題下に、先づペンサム及びマルクスの思想構成を解剖して兩者の異同を明かにし、次でペンサム主義がジェー・エス・ミル、及びナイー・エッチ・グリーンに依つて如何に解釋されたかを述べ、ペンサム主義の不純なるは上部構成として社會主義を採らぬ爲である。吾人は唯物史觀以外のイデオロギイに立つて社會主義を支持せねばならぬ。今日社會改造の氣運が青年の間に瀰りつゝある事は良き傾向であるが、其の主義としてマルキシズムを採るは矛盾である。這般の良き傾向を支持しつゝ、其の下層に良きイデオロギイを興へる事が、今日に於ける社會學徒の任務でなければならぬと論斷して當日の講演を終らる。